

北朝鮮に
出勤します

開城工業団地^{ケソン}
働いた一年間

キム・ミンジュ
岡裕美訳

新泉社



나는 개성공단으로 출근합니다
김민주

Copyright © 2019 by Kim Minju

All rights reserved.

Originally published in Korea by SANZINI Publishing, Busan.

Japanese Translation copyright © 2024 by Shinsensha Co., Ltd., Tokyo.

This Japanese edition is published by arrangement with
SANZINI Publishing through CUON Inc., Tokyo.

This book is published with the support of
the Literature Translation Institute of Korea (LTI Korea).

Jacket design and Illustration by KITADA Yuichiro

日本の読者の皆様へ

日本の読者のみなさん、はじめまして。

私にとって、日本は多くの意味を持つ国です。

韓国で、また海外で、日本人のよい友達にたくさん出会ったからです。

みなさんに朝鮮半島で起こった話をご紹介することができ、うれしく思います。

この本は、かの地で一日一日を生きている平凡な人々のお話です。

わたしが出会った人々をみなさんにもご紹介します。心の中で出会ってください。

貴重な時間を割いてこの本を読んでくださる読者の方々にお礼申し上げます。

キム・ミンジュ

目次

日本の読者の皆様へ	003
はじめに	012

I 開城で感じた春

開城に足を踏み入れた日	016
北朝鮮歌謡、心に残る人	022
“あのお方”の顔が描かれたバッジ？	027
マキシムコーヒーは韓国をのせて——開城への物品搬入	032
税関は黒いビニール袋を持って——サムギョブサルの上納	036
花束と参事官のおじさん、そして金正哲とエリック・クラブトン	041
給食施設の残飯と生ごみはどこへ？	049
一本のキンパから実感する南北の経済格差	052
三〇〇〇人分の食材、そして北朝鮮冷麺？	058
いいえ、開城工業団地風冷麺！	

II 開城で体験した夏

賞金戦争とカレイ事件 068

北の労働者はNG、平壤市民はOK 078

八月一五日、南は光復節、北は解放節 082

食事会の日は「お持ち帰り」が当たり前？ 087

ヒャンイの妊娠と職員たちの「総和」 090

ヒョスクの大事なぶどう、一房は嫁ぎ先に、もう一房は実家に 098

一トントラックで休戦ラインを越え結婚式へ！ 104

木箱地雷事件が開城工業団地の人々に及ぼす影響 109

III 開城で過ごした秋

統一の花、林秀卿 116

「ありがとう」と言うのはそんなに大変？ 119

田舎者のような北の軍人、シテイボーイのような南の軍人 123

宗教書の一節を理由に罰金一五〇ドル 128

北朝鮮女性たちの労働時間 131

USBと罰金二〇〇ドルで南北が一致団結 137

IV 開城で出会った冬

班長さん、みかんが必要なら先に言ってください

142

職員たちに渡したかったお餅、果物、そしてパン

147

免税店で働く北朝鮮女性

150

警備員さんと私

155

南北でキムチ交換

159

いまでも思い出す北の職員、リ・スンヒ

164

一二月一日、南北会談の日の冷泉サイダー

171

北のエリート女性、スヒ

175

一月六日の核実験、そして玄関前の北の配達員たち

179

開城に入るまで

184

おわりに

190

訳者あとがき

192

はじめに

二〇一六年、いつもと変わらない旧正月連休の最終日だった。

早朝の冷たい風に足先が凍え、顔は氷のように冷たくなるという北朝鮮の職員たちから、ボア付きの靴を買ってきてくれないかとかねがね頼まれていた。ソウル地下鉄二号線の往十里駅^{ワシムニ}で偶然安く売っている店を見つけてうれしくなった私は、小さな紙にメモしてきたサイズどおりに一足ずつ選んで代金を支払った。両手いっぱい靴を抱え、明日受け取ったみんなはどれほど喜ぶだろうかとうきうきしていたときにその連絡があった。

「開城工業団地、全面操業停止」^{ゲンシ}

実感が湧かなかった。『明日、開城に行けなくなるってこと？ 本当に？ どうして誰からも連絡がないんだろう？』どこに連絡すればいいのかもわからないまま、知人を通じて状況を把握しようとしていると、自国の状況を韓国人の私よりも知らない職員たちのことが思い浮かんだ。『まだ二月で寒いのに、明日の朝、建物の入口で震えながら待つんだろうな……。』どうやって連

絡すればいいのか心配になった。

「店長先生、南に帰ってください。また戻ってこようと思わないで、無理しないでくださいね。旦那さんと一緒に、子どもをつくって幸せに暮らしてください」

しばらく前、食堂の職員のスギは班長がいらない隙にこう言った。その隣でジョニーは「店長先生と別れることを考えると、泣けてきてしょうがないんです」と涙をぬぐった。私たちにはまだ時間が残されていると思っていたのに、こんなに早いとは思わなかった。詩人の誰かの言葉のように突然で思いもよらぬ別れに、頭が真っ白になった。休戦ラインの向こうにある私の職場は北朝鮮の軍人たちに掌握されたというが、韓国人と一緒に働いていた北の職員たちの身になにごともないか心配になった。

食堂で給食として出されたトマトソーススパゲティが変な味だと言ってキムチの汁を混ぜて食べ、こんな草をなぜ食べるのかとサラダは口にせず、じゃがいもなんて見たくもないと手をつけず、目玉焼き一つをめぐって全員で闘争(?)した北朝鮮の職員たち。結婚直前、付け焼き刃的なダイエットをする私に「そんなにご飯を抜いたら死にますよ!」と心から心配してくれた人たちの姿が浮かんた。妊娠した職員のヒャンイを早めに産休に入らせておいてよかったと思った。

坪数によって家賃が変わることを知らなかったという北の税関職員は、いまではその違いがわかるようになったという。労働者たちの勤務時間に応じて報酬が増減することを理解し、工場の月給以外に労働^{*1}〔労力報酬〕として受け取る韓国製品を闇市で売ることですべて全土に韓国の品物を流通

させ、聞いていた話とは違って韓国にも“自分たちと同じ人間”がいるということを知りつつあった北朝鮮の人たちは、いま何を考えているだろうか？

連休明けにみんなで食べようと思っていた、事務所のデスクに置いたままのリングとお菓子。

そして宿舍の服や生活用品、冷蔵庫の中の食材。何も持ち帰れないまま開城の職場を失い、これからどうしようかと茫然自失する人々と一緒に途方に暮れていた二〇一六年の早春の記憶。

これは開城での春夏秋冬、そして次の春も一緒に過ごしたかった、私が出会った人々についての物語だ。

*1 韓国製の品物を現物支給する制度。三〇～五〇米ドル程度の品物が支給され、品目は会社によって異なるが、柔軟剤、食用油、シャンプー、ボディソープなどが一般的だった。子どもがいる場合は粉ミルクを支給することもあった。

開城に足を踏み入れた日

二〇一五年の春、私はいまでは存在しないDCFという韓国の給食業者に就職した。大学院を卒業後、南北統一事業関連の仕事を探そうと「北朝鮮＋栄養」という検索ワードを入力してエンターキーを押すと、北朝鮮・黄海北道〔現・開城特別市〕の開城支店で勤務する栄養士を募集しているという求人広告が表示された。その日のうちに履歴書を送り、翌日に面接を受けた。

その会社は、金剛山クムガンサンと開城で給食事業を展開していたそうだ。金剛山観光の中断後、ほとんどの支店が閉店して休戦ラインの北側には開城支店だけが残っており、人がよく辞めるのだと聞かされ、若いあなたが耐えられるのかも訊かれた。「最善を尽くします」と落ち着いて答えつつ、心の中では「もちろん!! この日のために栄養学を勉強したんだから!!」と快哉を叫びたい気持ちを抑えていた。面接後、すぐに連絡があった。結果は合格。一時間ほどの簡単な引き継ぎと、統一教育院ユニエデュでのオンライン研修を受けて荷造りをした。

開城に行く前夜、「休戦ラインを越えるなんて……、本当に？ 北へ行くの？」と布団をかぶ



おわりに

本書の文章は、二〇一五年春から二〇一六年の初春にかけて北朝鮮の開城工業団地工業地区で栄養士として働き、四季を過ごした私の主観的な記録です。拙い文章ですが、韓国で育った人間の目で見た彼ら彼女ら、北朝鮮の体制の中で暮らす開城の住民と交流し、観察し、感じた点を素直に綴りたいと思いました。

胸を高鳴らせながらキャリーバッグ一つを手を訪れた開城で過ごした一年間のことは、時には名残惜しさ、時には恥ずかしさ、時には懐かしさとして、心の片隅に残っています。それでもこの文章を世に送り出すのは、いつかやってくる“統一”に備えたかったからです。私たちが向かい合うとき、韓国と北朝鮮それぞれの考えや感性や言葉を理解できることを願っています。表面に見えるものの裏側にある話を、当時はそのように言うしかなかった人々の状況を理解するのに少しでも役に立てばと思います。この文章が一〇〇パーセント正解というわけではありません。長いといえば長く、短いといえば短い北での生活は、ひよっとしたら群盲象を評するものだったと

いえるかもしれません。でも、この本を読んだ誰かがそれぞれの分野で統一に備え、向かい合つて、北朝鮮という象の感触やにおい、大きさ、形を知り、互いをもっと透明に、まっすぐに見つめることの一助になれば幸いです。

この本を通じ、きょう一粒の種を植えました。一粒の黄金は土の中に植えられて一〇〇年、二〇〇年が過ぎてもそのままですが、小さな種は土の中で根を張り、木として育つて大きな森になります。その森で未来の子どもたちがより平和で仲良くできることを願つてこの文章を締めくくろうと思います。

最後まで読んでくださり、ありがとうございました。

訳者あとがき

本書は、二〇一九年一二月に韓国・釜山^{プサン}の出版社サンジニ(산지니)から出版された『나는 개성공단으로 출근합니다(私は開城工業団地に出勤します)』の全訳である。

韓国人の著者、キム・ミンジュ(김민주)は二〇一五年春から二〇一六年初春までの約一年間、南北経済協力事業の一環として北朝鮮の開城^{ケソン}に造成された開城工業団地で勤務した。本書は、著者が同団地で見聞した出来事や、北の人々との交流を綴ったエッセイだ。

著者は、一九九〇年代に多くの餓死者を出した食糧難をきっかけに北朝鮮に関心を持ち、大地震に見舞われたパキスタンでボランティア活動を行ったことで、飢餓に苦しむ北朝鮮の子どもたちを救う栄養分野の専門家を志すようになった。韓国統一部と国連世界食糧計画(WFP)韓国事務所で働いたのち、「苦難の行軍」^{고난의 행군}(一八八頁)と呼ばれた食糧難の中で成長期を過ごした北朝鮮住民の栄養状態をテーマとする論文で修士号を取得。就職活動をしていたところ、開城工業団地で勤務する栄養士を募集する韓国企業に採用され、平日は軍事境界線を越えて北朝鮮で働き、週末

には韓国に戻って過ごすという特別な経験をすることになる。

北朝鮮の飢えた子どもたちを救い、南北統一に役立ちたいというひたむきな思いを胸に開城工業団地に飛び込んだ著者が出会ったのは、「一日一日を生きている平凡な人々」だった。職場である給食施設の班長と職員たちをはじめ、縫製工場でミシンを踏む労働者、税関職員、軍人、免税店の店員、警備員、フライドチキン店の配達員……、誰もがおいしいものはまず家族に食べさせたいと考え、嫁姑問題に悩み、流行歌を口ずさむ、私たちと変わらない人たちだ。

韓国人と北朝鮮の人々が出会う話として、世界的にヒットした韓国ドラマ「愛の不時着」を連想した読者もいるのではないだろうか。本書には、このドラマとも関連のあるエピソードが登場する。「北朝鮮歌謡、心に残る人」の章(二二頁)で、著者は給食施設を利用する韓国人の客から理不尽な叱責を受け、ホームシックになって涙するが、そのときに訪れたレストランで流れていたのは、北の人々から愛されている〈心に残る人〉という歌謡曲だった。

一方、「愛の不時着」でパラグライダーの事故により北朝鮮に「不時着」した主人公のユン・セリは、朝鮮人民軍の中隊長リ・ジョンヒョクが住む村に匿かくまわれる。ある日、大佐夫人の誕生日会に招かれたセリは、名前を訊かれてとっさに部屋にあったレコードに書かれていた歌手名の「チェ・サムスク」と答えるが、このレコードのタイトルこそが〈心に残る人〉だ。この曲は一九八九年に公開された同名の映画の主題歌で、チェ・サムスクは約三〇〇〇曲のレパートリーを

持ち、国家最高の荣誉である「人民俳優」の称号を与えられた国民的歌手だ。彼女の娘は中国・浙江省の北朝鮮レストランで働いていたが、二〇一六年に他の従業員たちと集団脱北し、現在は韓国で暮らしている。

ドラマの中の北朝鮮住民たちの日常と本書で描かれている開城工業団地の姿は、似ているように異なる部分もある。著者も明らかにしているように、開城工業団地で働く人々の生活水準は他の地域に住む北朝鮮住民に比べて高く、恵まれた環境にあるとされるが、それでも「平凡な人々」であることに変わりはない。

最高指導者を頂点とする抑圧的な社会構造の中で、互いに監視しながら規則に縛られて生きる北の住民たちの現状について、著者は「これは平等だ、不平等だと判断するだけの情報を手に入れる自由がないこと」(二八一頁)が問題だと指摘する。そして、このような北朝鮮の人権状況について何度も人々と対話を試みようとするが、最後まで核心に触れることはできないままに終わる。

著者が開城で過ごした間にも南北間では木箱地雷事件(二〇九頁)など緊張の高まる局面があり、「光復節」と「解放節」をめぐる職員たちとの一触即発のやりとり(八二頁)のように微妙な空気が流れることもあった。そんななかでも、共に日常を過ごすうちに互いに対する思いやりが芽生え、心が通い合っていく様子は救いを感じさせる。

開城工業団地は二〇一六年の閉鎖後、二〇一八年の南北首脳会談で操業再開が合意されるも、現在に至るまで再開の動きはみられない。さらに、二〇二三年に南北軍事合意の破棄を宣言した北朝鮮は、韓国と開城工業団地を結ぶ京義線道路に地雷を埋設して事実上封鎖。団地内の施設を無断で稼働させるなどの強硬な行動に出て南北の人々の距離を遠ざけている。

著者が見据える将来の南北統一に向けては経済格差や政治問題、イデオロギーの違いなど、解決しなければならぬ課題が山積している。だが、本書から伝わる北の人々の息づかいは、少なくとも南北が相互理解を深めるための糸口となるだろう。

本書が日本の読者にとっても、ニュースで報じられる核やミサイルの話だけではない、北で暮らす「平凡な人々」のことを知る一助になればと願っている。

翻訳にあたり温かい励ましの言葉をくださった著者のキム・ミンジュさんと出版社サンジニのみなさん、翻訳・出版支援でお世話になった韓国文学翻訳院のみなさん、編集にあたってくださいました新泉社の安喜健人さんに心から御礼申し上げます。

二〇二四年六月

岡 裕 美